

〔論文〕

# 自閉症スペクトラム児の食行動問題に対する研究

—保護者支援に向けて—

小島 賢子  
Satoko Kojima

大阪総合保育大学大学院  
児童保育研究科 児童保育専攻

**要旨：**本研究の目的は、自閉症スペクトラム障害（以下 ASD）児の食に対するこだわり行動と離乳期の食発達行動に関係性があることを明確にすること、次に ASD 児の離乳期における食発達行動に影響を与えている要因を明らかにし、ASD 児の保護者を支援する方向性を明らかにすることである。今回、定型発達児を持つ保護者、ASD 児を持つ保護者、その他の発達障害児を持つ保護者に質問紙調査を行った。調査紙の分析の結果、ASD 児の食のこだわり行動と離乳期の食発達行動に関係性があることが明確になった。また、ASD 児の離乳期における食発達行動に影響を与えている要因が自閉症の行動特徴や感覚の異常、社会関係形成の困難さであることが考えられた。時期を待って食べられる物を増やすといった偏食指導では ASD 児の保護者の精神的負担がかえって大きくなる可能性が導き出された。よって、ASD 児の保護者に対する食行動問題に対する支援は、子どもの個別な食へのこだわり行動から、食事の環境や道具の触感、味覚など幅広い分析を行ったうえかわることが必要であり、保護者の心理的支援が重要となることが明らかになった。

**キーワード：**自閉症スペクトラム児、偏食、こだわり行動、保護者支援

## 序 論

平成 17 年に「食育基本法」が公布され、子どもの発育、発達過程に応じて食べる力を育てることが期待されてきた。そのため、子どもが食発達を通して、一人で食べることができるようになることは幼児期の課題として重要である。この食の自立過程とは母親と子どもの間にダイナミックに展開される社会現象であること。また、子どもにも子どもなりの食への志向性があり、それが養育者とずれる場合は、食をめぐるトラブルが生じることもあると指摘されている（根ヶ山，2007）。未就園児の 96% の母親が食事に関する悩みを持つことを明らかにしている（風間，2006）。また、子どもの肥満傾向について、2006 年の学校保健統計調査報告書の年次統計では、近年の 30 年間の出現率は学童期において 2～3 倍となっている。平成 20 年度は十人に一人が肥満傾向にある結果が示されている。学童期は、食事のパターンや習慣が確立していることが考えられ、それ以前の早い時期として、離乳期の食発達を確立する時期での対応が必要となる。また、授乳期と離乳期、幼児期の関連性があり、重要な時期であるとしている（酒井，2007）。そのため、離乳期の母親に対して、食発達に合わせた食事への支援が必要となる。しかし、子どもが一人で食べるようになる過程の食発達に焦点を当てた、食事に対する保護者への支援を明らかにした研究は少ない。

そこで、食発達に自閉症の特性が示される自閉症スペクトラム障害（以下 ASD）児の食問題行動に着目した。ASD 児の肥満の原因については、食の問題行動が大きく、「早食い」「偏食」「コミュニケーション不良による食への転化」が特徴的であるといわれ、原因は、自閉症の感覚の偏りやこだわり行動によるものであると考えられている。離乳期は食発達を獲得する時期となり、食べる行為の始まりである。刺激に対して過敏に反応する ASD 児にとって、離乳期は食問題行動（偏食や異食）を引き起こす可能性がある時期となる。ASD 児に特徴的である食発達行動の項目から、ASD 児の食事へこだわり行動に影響を与えている要因を分析し、食発達をふまえた食事への支援について明らかにすることができれば、今後、すべての発達状況にある子どもが食事に対して困難な状況に陥った時、保護者に対して食事を促す方法を示すことができると思う。

## I. 研究目的及び方法

### 1. 研究の目的

本研究の目的は、自閉症スペクトラム障害（以下 ASD）児は他の発達状況の子どもと比較して、食事に対するこだわり行動が出現しているかを明らかにする。また、離乳期の食発達行動の項目で、ASD 児が他の子どもと比べて特徴的な項目を検討し、ASD 児の食事へのこだわり行

動に影響を与えている要因を明らかにし、食事に対する保護者への支援を示すことである。

## 2. 倫理的配慮

調査項目の表現に関しては、成人期の障害者の保護者にプレテストを行った。さらに、自閉症センターの職員に質問項目の内容と量に対して助言を受けた後、再度作成したものを配布した。実施前に研究目的、方法、危険因子等について説明を行った。その上で自由意思による研究参加の協力について理事会、保育園の了承を得た。2008年7月3日付にてA大学の倫理委員会での承認を得た。

## 3. 研究対象

A市療育支援センターに通園する発達障害児の保護者200名、一般の2つの私立保育園に通園する定型発達児の保護者198名である。分析の対象児は、離乳期を過ぎた年齢とした。定型発達児の年齢は3歳児～4歳児未満を対象とした。発達障害児は3歳くらいから現れるため3歳～5歳未満を対象とした。ASD児42名、定型発達児72名、他の発達障害児48名である。

## 4. 用語の定義

- 1) 自閉症：3歳くらいまでに現れ、①他人との社会的関係の形成の困難さ、②言葉の発達の遅れ、③興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害であり、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。(文部科学省：平成15年3月の「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」)
- 2) 自閉症スペクトラム：ローナ・ウィングが提唱した概念。自閉症とアスペルガー症候群、非定型自閉症を併せて、自閉症スペクトラム障害という。
- 3) 自閉症のこだわり：限定され、いつも同じような形で繰り返される行動・興味・活動のこと。(DSM診断基準より)
- 4) 偏食：食物の好悪感情の程度が強く、限られた特定のものしか食べないこと。

## 5. 研究方法

- 1) 調査方法：理事会及び保育園長に研究の主旨を説明した。承認と同意を得た後、質問紙を配布し本人にて記入後、郵送してもらった。
- 2) 調査期間：2008年7月～8月
- 3) 調査項目：現在の子どもにある食事に対するこだわり行動の有無及び離乳期の子どもの食発達行動と食事環境、保護者の状況と思いである。

調査項目内容は①食べる機能として、嚥下機能、摂食機能(捕食機能・押しつぶし機能・咀嚼機能)を質問項目1～4とした。また、自食機能(準備・手づかみ食べ機能・食具、食器食べ機能)を質問項目5～8とした。②食物の好き嫌いは、心理的な発達も影響があるため、新奇性恐怖(食べたことのない食物の摂取を躊躇し、摂取回避する行動のこと)の質問項目9～12と子どもの行動にしばしばみられるサンプリング(ほんの少しを食べてみて、味をしっかりと確かめ見極め少しずつ食べていく行動のこと)の質問項目13を取り入れた。味に関係する嗅覚の項目と食物の好悪を直接に左右する味への生得的好悪(遺伝情報として生得的に持っている好き嫌いのこと)の項目を質問項目14～16とした。③食べたいという欲求には食物の与え方、雰囲気、が左右するため、与え方の項目はなじむ(子どもが慣れ親しんでいるなじんだ食べ物を与える)という質問項目17～19、22、24とし、モデリング(親、教師や仲間をモデルにしてその行動を模倣し新しい反応を引き起こすこと)の質問項目20、21、23、食事を一定時間や同じ人が与えるか、雰囲気という項目を質問項目25～27とした。さらに、④環境は与える側の子どもへの心理的な圧迫として、保護者の気持ちを聞く質問項目28～29とした。⑤最後に偏食を聞く質問項目30～31を入れた。(表1)

食行動に対するこだわりについては、表1以外の別項目として「現在、食事に対するこだわりがありますか」という質問項目をのせた。回答については「ある」「どちらともいえない」「ない」とした。

表1の質問の回答は①非常にあてはまる②ややあてはまる③あまりあてはまらない④全くあてはまらないという4段階の回答とした。また、覚えていないこともあるため質問紙には⑤覚えていないという回答項目をつけた。

4) 分析方法：分析にはSPSS 21.0を使用した。質問紙の回答について「⑤覚えていない」については、分析対象としていない。発達の違いと食のこだわりの有無については、クロス集計しカイ二乗検定を行い、離乳期の食発達行動の項目で、ASD児が他の子どもと比べて特徴的な項目については、マンホイットニー・ウイルクソン検定および、クラスカル・ウォリス検定を行った。有意水準は5%とした。

## II. 結果

### 1. 対象者の概要

#### 1) 回収状況

通園施設は、発達障害を持つ親と子の療育支援センターである。就学前の肢体不自由児、知的障害児、自閉

表1 離乳期における食発達行動の状況

	質 問 項 目
嚥下機能 捕食機能	1. 離乳は円滑に順調に進んだ
	2. 離乳期の初めの頃、口に入れても呑み込めなかった
	3. 離乳期中期（7～8ヶ月）頃に噛まずに食べ物を丸のみしていた
	4. 食事以外の場面で玩具などをかむ遊びが多くなった
自食機能	5. 離乳期の後期（9～11ヶ月）頃に手づかみで食べ始めた
	6. 手づかみ食べができる頃から、食べ物を前歯で噛み切ることができるようになった
	7. 離乳期の後期に食べ物で前掛けが汚れることが多かった
	8. 1歳半頃から食器で食べることができた
新奇性恐怖 サンプリング	9. 食べ物を口に入れようとする拒否することが多かった
	10. 初めての食べ物は、ほんの少しだけ口に入れて吐き出す行為があった
	11. 食べ物の味付けが変わると食べないことが多かった
	12. 食べ物はなじみのあるものしか食べなかった
	13. 目新しい食べ物は積極的に食べることができた
嗅覚 生得的好悪	14. 食べ物の臭いによって食べられなくなった
	15. 食べ物の味付けは甘い物を好んで食べた
	16. 食べ物の味付けで塩味を好んで食べた
モデリング 馴染み 一定時間	17. 食べ物を置く位置が変化すると食べるのを嫌がった
	18. 初めての食べ物でも1、2回で食べられるようになった
	19. 食器が変わると食べるのを嫌がった
	20. 食事に集中して食べるほうだった
	21. 食事を楽しそうに食べていた
	22. 食べられない原因は食物の外見であった
	23. お友達がいると食べられる物が増えた
	24. 初めての物を食べる時はいつも機嫌が悪く怖がった
	25. 離乳食を決まった時間に食べさせることができた
	26. 同じ人が食事を与えることができた
	27. 食べる時の雰囲気を楽しくできた
環境	28. 食べさせる時いらいらした
	29. 食べさせる時早く終わらせようと焦った
偏食	30. お子様は好き嫌いの程度が強いと感じた
	31. お子様の食物の嗜好や選択するものが限られていると感じた

症児を受け入れている。通園施設の発達障害児 220 名と保育園に通う定型発達児 198 名である。回収数は発達障害児 93 名（回収率 42.2%）、定型発達児は 80 名（回収率 40.0%）、うち有効回答数は発達障害児 90 名、定型発達児 72 名である。

2) 対象の基本属性

今回の調査の対象の基本属性は、子どもの月齢と保護者の年齢を表2に示した。子どもの月齢の平均 49.6 ヶ月（± 16.6）である。内 ASD 児は、54.3 ヶ月（± 11.2）、定型発達児は 47.0 ヶ月（± 20.1）、他の発達障害児は 49.3 ヶ月（± 13.9）であった。全体の通園した月齢は平均 28.8 ヶ月（± 17.8）であった。保護者の年齢は、平均 35.9 才（± 9.9）であった（表2）。ASD 児とそれ以外の先天的と後

天的な障害児、診断名なし、及びそれ以外の発達障害といわれている子どもたちの内訳を図2に示した。ASD 児の割合が他の発達障害児の割合より多かった。

表2 子どもの月齢と保護者の年齢表 n=162

	数	平均値	SD
子どもの月齢	162	49.6	16.6
ASD 児の月齢	42	54.3	11.2
定型発達児月齢	72	47.0	20.1
他障害児月齢	48	49.3	13.9
通園を始めた月齢	162	28.8	17.8
保護者年齢	159	35.9	9.9

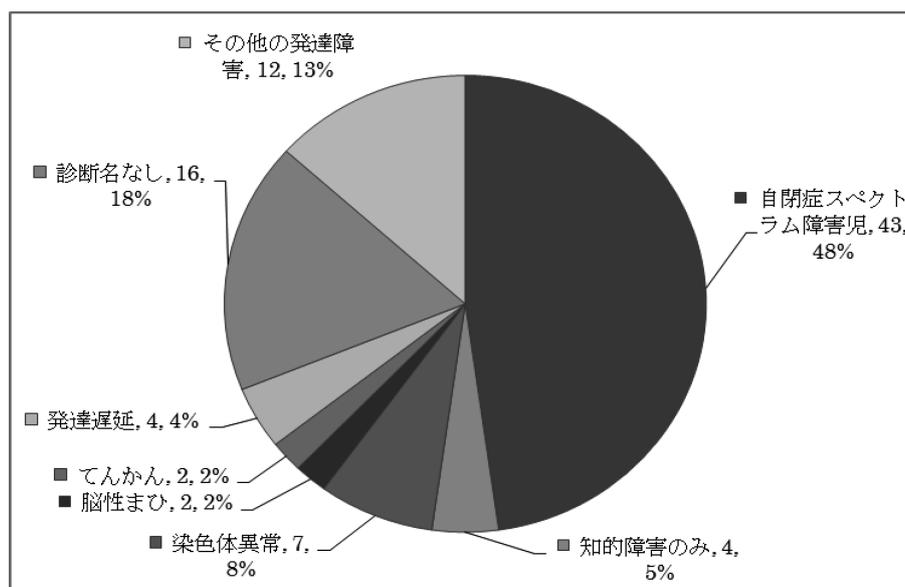


図1 発達障害児の内訳 n = 90

## 2. 食事に対するこだわり行動の検討

### 1) 食事に対するこだわり行動と発達状況について

現在の「食事のこだわり行動がある」の割合は、定型発達児が45.8%、ASD児は78.6%、他の発達障害児は64.6%であり、ASD児が他の発達状況群の中で最も高い割合であった(表3)。

そこで、ASD児の特徴であるこだわり行動が要因となっていることが考えられたため、ASD児と他の発達状況の子ども群に分けた。現在の食事のこだわり行動と発達状況の違いとの関連を明確にするため、クロス集計しカイ二乗検定を行った。結果、発達状況と現在の食のこだわり行動は有意な関連性が認められた。ASD児群と「食事へのこだわり行動がある」がより高く、「食事へのこだわり行動がなし」が低く関連した。その他の発達状況の子どもは、「食事へのこだわり行動がなし」が高く、「食事へのこだわり行動がある」が有意に低く関連した。(表4)

表3 発達状況における現在の食事のこだわり行動の有無の割合

発達状況の違い	食事へのこだわり行動 人 (%)	
	なし	あり
定型発達児	39 (54.2)	33 (45.8)
ASD児	9 (21.4)	33 (78.6)
他の発達障害児	17 (35.4)	31 (64.6)

表4 発達の違いと食へのこだわり行動のクロス表

		食のこだわり行動		合計
		なし	あり	
発達の違い	定型発達児・他の発達障害児	度数 56	64	120
	期待度数	48.1	71.9	120
	調整済み残差	2.9	-2.9	
発達の違い	自閉症スペクトラム障害児	度数 9	33	42
	期待度数	16.9	25.1	42
	調整済み残差	-2.9	2.9	
合計	度数	65	97	162
	期待度数	65	97	162

$$\chi^2 = 8.248 \quad p < .001$$

### 2) 食事へのこだわり行動と離乳期の食発達行動の差

現在の食事へのこだわり行動が「ある」群と「なし」群によって、それぞれの子どもの離乳期の食発達の過程に差があるのかを明らかにするため、離乳期の食発達の項目についてどの項目に差があるかを分析した。結果、食事へのこだわり行動の「あり」群が「なし」群に比べて最も差があった項目は「味付けで塩味を好んで食べた」と「好き嫌いの程度が強いと感じた」「食べ物の嗜好や選択するものが限られていると感じた」であった。次に差があった項目は、「初めてのものを食べる時にはいつも機嫌が悪く怖がった」また、平均ランクに差が低くあった項目は「なじみのあるものしか食べなかった」「食べさせる時いらした」の項目であった。「現在の食の

こだわり行動が「なし」群が「あり」群の項目のうち最も高く差があった項目は、「離乳が円滑に順調に進んだ」「離乳期の後期（9～11か月）頃に手づかみで食べ始めた」「手づかみ食べができる頃から前歯で噛み切ることができるようになった」「1歳半頃から食器で食べることができた」「食事を楽しそうに食べていた」であった。差が有意に低くあった項目は、「離乳食を決まった時間に食べさせることができた」の項目であった。（表5）。

### 3. ASD児の食発達の特徴について

#### 1) 発達の違いによる食発達行動項目への回答の差

ASD児の食発達の特徴を明らかにするために、ASD児群と定型発達児とその他の発達障害児群とに分け分析をした。離乳期における食発達行動の項目に各群で回答に有意な差があるのかクラスカル・ウォリス検定を行った。有意に最も大きく差があった項目は、「後期頃に手づかみで食べ始めた」「手づかみ食べができる頃から前歯で噛み切ることができるようになった。」「1歳半頃から食器で食べることができた」「お友達がいると食べられる物が増えた」であった。大きく差があった項目は、「食物の嗜好や選択するものが限られていると感じた」「初めての物を食べる時はいつも機嫌が悪く怖かった」「食

事の好き嫌いの程度が強いと感じた」「なじみのある物しか食べなかった」「目新しい食べ物は積極的に食べることができた」「食事を楽しそうに食べていた」「後期に食べ物で前掛けが汚れることが多かった」「食べられない原因は食物の外見であった」、であった。比較的差がある項目は、「初めての食べ物でも1、2回で食べられるようになった」「食べ物の味付けが変わると食べないことが多かった」「食べさせる時早く終わらせようと焦った」「食べさせる時イライラした」の項目であった（表6）。逆に差のなかった項目は、「離乳が円滑に順調に進んだ」「離乳期の初めのころ、口に入れても飲み込めなかった」「食事以外の場面で玩具などをかむ遊びが多くなった」「食べ物を口に入れようとすると拒否することが多かった」「初めての食べ物は、ほんの少しだけ口に入れて吐き出す行為があった」「食べ物の臭いによって食べられなくなった」「食べ物の味付けは甘いものを好んで食べた」「食べ物の味付けで塩味を好んで食べた」「食べ物を置く位置が変化すると食べるのを嫌がった」「食器が変わると食べるのを嫌がった」「食事に集中して食べるほうだった」「離乳食を決まった時間に食べさせることができた」「同じ人が食事を与えることができた」「食べる時の雰囲気を楽しくできた」であった。

表5 現在の食事へのこだわり行動と離乳期の食発達行動項目の差

現在の食事へのこだわりの有無	なし群 (平均ランク)		Z 値	有意確率 (両側)
	あり群 (97)	なし群 (平均ランク)		
食発達行動項目	なし群 (65)	平均ランクの差>		
離乳が円滑		なし群 (92.65) > あり群 (71.48)	-2.988	**
後期に手づかみで食べる		なし群 (84.67) > あり群 (66.35)	-2.648	**
前歯で噛み切る		なし群 (69.67) > あり群 (54.80)	-2.366	**
1歳半食器で食べる		なし群 (88.13) > あり群 (65.05)	-3.329	**
楽しく食べる		なし群 (88.83) > あり群 (72.05)	-2.393	**
決まった時間に食べる		なし群 (88.61) > あり群 (73.30)	-2.249	*
塩味を好む	あり群 (87.24)	> なし群 (59.41)	-4.207	***
嗜好や選択に限り	あり群 (90.03)	> なし群 (61.02)	-4.111	***
食事の好悪程度強い	あり群 (90.11)	> なし群 (63.91)	-3.689	***
初めては不機嫌	あり群 (83.59)	> なし群 (62.61)	-3.171	**
なじみのある物しか食べない	あり群 (85.56)	> なし群 (65.86)	-2.794	*
食べさせる時の苛立ち	あり群 (85.63)	> なし群 (70.72)	-2.117	*

Mann-whitney,wilcoxon a グループ化変数：食のこだわり  
\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

表6 食発達行動と発達状況に差がある項目

食発達行動の項目	カイ2乗	漸近有意確率	食発達行動の項目	カイ2乗	漸近有意確率
離乳が円滑に進む	10.400	**	楽しく食べる	11.597	**
後期に手づかみ	47.463	***	食物の外見	10.542	**
前歯で噛み切る	36.838	***	友達と食べる効果	30.841	***
後期に前掛けが汚れる	12.100	**	初めては不機嫌	13.429	**
1歳半食器で食べられる	18.576	***	食べさせる時の苛立ち	6.392	*
味の変化で食べない	5.465	*	食事終了にあせり	7.337	*
なじみのある物しか食べない	8.918	**	食事の好悪程度強い	9.697	**
目新しい物を積極的に食べる	11.456	**	嗜好や選択に限り	13.931	**
1、2回で食べられる	8.662	*			

A Kruskal Wallis 検定 B グループ化変数: 発達 \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

## 2) ASD 児と定型発達児の食発達行動の比較

発達の状況の違いによって、離乳期の食発達行動に有意に差があるという結果を得た。そこで、ASD 児と定型発達児を比較して、食発達行動項目の回答に有意な差があるかを検定した。その結果、ASD 児が定型発達児より、平均ランクの差が有意に大きく認められたものは、「食物の嗜好や選択するものが限られていると感じた」、「食事の好き嫌いの程度が強いと感じた」、「食べさせる時早く終わらせようと焦った」、「なじみのある物しか食べなかった」、「初めての物を食べる時はいつも機嫌が悪く怖かった」、「食べ物の味付けが変わると食べないことが多かった」、であった。次に差があった項目は、「食べさせるときイライラした」であった。定型発達児が ASD 児より平均ランクの差が有意に大きく差があった項目は、「後期に頃に手づかみで食べ始めた」、「手づかみ食べができる頃から前歯で噛み切ることができるようになった」、「1歳半頃から食器で食べることができた」、「食事を楽しそうに食べていた」、「お友達がいると食べられる物が増えた」であった。次に差がある項目は、「離乳が円滑に順調に進んだ」、「後期に食べ物で前掛けが汚れることが多かった」、「目新しい食べ物は積極的に食べることができた」、「食事に集中して食べるほうだった」、「初めての食べ物でも1、2回で食べられるようになった」であった。(表7)

## Ⅲ. 考察

### 1. ASD 児の特徴的な食発達行動の項目

今回の調査結果で、食発達行動の項目に各発達群で回答に有意な差があったものは、食べる機能として、自食機能の項目であった。また、食物の好き嫌いに影響する心理的な発達として新奇性恐怖やサンプリングと塩味を好むという生得的情報に関する項目であった。食べたいという欲求は、食物の与え方、雰囲気や左右するといわれているが、モデリングやなじみのある物や時間に関する項目に各発達群に差が認められた。

さらに、ASD 児の特徴的な食発達を明確にするため、定型発達児との比較を行った。この結果、定型発達児と比較して ASD 児の特徴として認められる項目は、なじみがある物や味付け、および、偏食の項目であった。ASD 児にとって、新奇性恐怖を持ち、なじんだものにこだわることや食物の嗜好や選択に限りがある行動、また、味の変化によって食べられないことは、味覚や視覚は感覚に起因した項目である。自閉症児は感覚の特異性と関連した強い偏食を示す例が多いとされている研究を支持するものとなった。定型発達児は、ASD 児と比較して離乳が円滑に順調に進む項目や捕食機能の項目、モデリングの項目に差があった。つまり、ASD 児は、食べる機能より、感覚の特異性から食事へのこだわり行動となる特徴を示していた。定型発達児は、食発達行動が進み、食事場面で仲間とかかわることで新しい自分の反応を引き起こす項目に特徴があった。このように、ASD 児は他人との社会的関係の形成の困難さを持っており、ASD 児の食事支援は、食事を味わって食べることや一緒に食べるこ

表7 ASD児と定型発達児との食発達行動における比較

定型発達児群 (72) ASD児群 (42)	定型発達児群 (平均ランク) ASD児群 (平均ランク) 平均ランクの差>	Z値	有意確率 (両側)
食発達行動項目			
離乳が円滑	定型発達児 (62.93) > ASD児 (45.37)	-2.925	**
後期に手づかみ	定型発達児 (63.70) > ASD児 (31.79)	-5.507	***
前歯で噛み切る	定型発達児 (50.14) > ASD児 (26.77)	-4.581	***
後期に前掛けの汚れ	定型発達児 (56.63) > ASD児 (40.07)	-2.931	**
1歳半食器で食べる	定型発達児 (66.07) > ASD児 (29.95)	-6.173	***
目新しい物を積極的に食べる	定型発達児 (62.54) > ASD児 (42.49)	-3.445	**
集中して食べる	定型発達児 (62.86) > ASD児 (46.71)	-2.604	**
楽しく食べる	定型発達児 (64.21) > ASD児 (43.15)	-3.494	***
友達と食べる効果	定型発達児 (65.87) > ASD児 (35.63)	-5.094	***
1、2回で食べることができる	定型発達児 (54.55) > ASD児 (39.84)	-2.766	**
味の変化で食べない	ASD児 (63.81) > 定型発達児 (48.14)	-2.724	**
なじみのある物しか食べない	ASD児 (64.05) > 定型発達児 (49.33)	-2.462	**
初めては不機嫌	ASD児 (64.93) > 定型発達児 (46.29)	-3.272	**
食事の時の苛立ち	ASD児 (65.23) > 定型発達児 (52.13)	-2.164	*
食事終了にあせり	ASD児 (67.42) > 定型発達児 (50.84)	-2.785	**
食事の好悪程度強い	ASD児 (68.92) > 定型発達児 (49.95)	-3.136	**
嗜好や選択に限り	ASD児 (69.31) > 定型発達児 (48.81)	-3.397	**

Mann-whitney・Wilcoxon 検定 グループ化変数: 発達  
\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

とで食発達を進めることが難しいと推察される。それに比べ定型発達児がASD児より高い項目は、食べる行動の自立であり、社会的相互作用による食発達の項目であった。定型発達児の食事への支援は、一人で食べることができるよう発達することを支援していくことが大切である。仲間の中で楽しく食べる環境づくりが効果的であるということが考えられる。

## 2. ASD児の食事へのこだわり行動に影響を与えている要因

発達の違いと現在の食事へのこだわり行動の関連性について、ASD児群が「食事へのこだわり行動がある」がより高く、「食事へのこだわり行動がない」は低く関連した。このことから、ASD児は、他の発達状況の子どもに比べて、より多く現在も食事へのこだわり行動を持つことが考えられる。こだわり行動は「社会に適応することができない行動障害（不適応行動）」また、「その場の状

況や事柄と同一性を保ちたいという行為のこと」(柳沢ら, 2012)といわれている。また、想像力の障害もあるため、不安が生じる可能性がある。そのため、初めての物に対する恐怖があることから、ASD児は食事へのこだわり行動が長期化する可能性が考えられる。しかし、定型発達児や他の発達障害児の現在の食へのこだわり行動の人数割合は高かったことから、今後、どんな発達状況にある子どもであっても食事への支援は必要となることであろうがえた。

今回の研究では、食事へのこだわり行動として質問のみであり、具体的な食物の指摘はしていない。食物の本来の味が影響しているのか、また、味だけでなく口当たりや臭いといった味覚に影響される事柄が何かを明確にすることができなかった。同時に、ASD児の感覚の特異性はその子ども特有のものであるため、個別的なこだわり行動の理解が重要となる。ASD児がどのような食べ物躊躇し回避するのかを保護者と共に考えなくてはいけ

ない。定型発達児との比較で、食事を与える ASD 児の母親の気持ちが、焦りや苛立ちの項目に有意な差がある結果となったが、焦りや苛立ちによって無理な食事のかわりか、食事のこだわり行動に影響を与える可能性も考えられる。

### 3. ASD児の保護者に向けての支援

ASD 児の食発達の特徴の結果は、なじみがある物や味付け、および、偏食の項目であった。ASD 児の食問題行動である、食事へのこだわり行動をできるだけ長引かせないことや解決できる状況にとどめるために保護者への支援が必要である。なぜならば、ASD 児の食事へのこだわり行動が、その子どものこだわり行動や感覚の特異性や社会関係の困難さに起因するのであれば、その子どもの食発達に合わせた離乳食の進め方や食事環境の整え方を慎重に考えなければならないからである。偏食指導として、できるだけ食べさせるという指導であれば、ASD 児に苦痛を与えることが考えられる。逆に ASD 児は食べることができる時期を待つことが良いという研究の結果がある。しかし、一回も食べていないものを新たに食べるということは、想像力の障害から新奇性恐怖を持つ ASD 児にとって、より食べる困難さを招くことが考えられる。そこで、こだわり状況を把握して、何に対してこだわりを持つのか、何が刺激となるのかを離乳期のエピソードを聞き取り、食事の与え方ではなく、支援すべきこだわり行動やこだわり行動を引き起こした背景は何かを考えることが必要であることが、示唆された。また、運動能力や感覚の異常などから引き起こされる子どもの個別なこだわりを、多角的に分析することが食問題行動への援助となる可能性がある。その際の保護者の役割も重要となる。先行研究では、食発達における食行動について、母親の食生活が影響すること、母親の食事の配慮が直接的に、母親の育児不安やストレスが間接的に子どもの食行動の問題に影響を与えるという結果がある。また、一般の保護者の食事への配慮のなさが子どもの食物の選択の幅を狭めているという結果が報告されている。保護者は、食問題行動そのものに負担を感じ、食事に際して苛立ちや焦りといった気持ちをさらに持ちやすくなる。また、積極的な姿勢を持つことが困難である。そのような保護者に対して、心理的支援を行う必要がある。そこで、組織的な協力体制をつくることが重要となる。そのことが、保護者の相談者を組織づけることとなるため、保護者の必要な時に必要な人が相談にのるという体制作りが必要である。

食発達を視点に ASD 児の特徴や食問題行動を考えてきた。しかし、定型発達児と比較することにより、一人で

食事をとることができるまでの過程で、どのように関わればよいかを考えることができた。前述のように、定型発達児や他の発達障害児の現在の食へのこだわり行動の人数割合は高かったことや多くの母親が食事に対する悩みを持つことから、定型発達児や他の発達障害児であっても離乳期の食発達をふまえた支援を行うことが必要である。また、子どもの食発達の過程で「むら食い」「食事が遅い」「食べる量が少ない」「偏食がある」などの問題が起こることがある。その際、食発達の視点に立って、食べる機能や食の心理的側面、社会的相互作用などを多角的に判断し、かかわることが必要となる。何が食行動の問題の要因となるのか明確にし、支援方法を考える必要があり、今後の課題となる。

### IV. 結論

1. ASD 児は、食べる機能より、感覚の特異性から食事へのこだわり行動となる特徴があることが示唆された。
2. ASD 児の食発達行動に影響を与えている要因は、自閉症の特徴であるこだわり行動や感覚の特異性と社会的関係の形成の困難さであるということが考えられた。
3. ASD 児の保護者は、離乳期の食の自立過程では、積極的な取り組みが困難となる。食べるものを増やす偏食指導だけでは、保護者の精神的負担を増大させる可能性がある。
4. ASD 児の個別なこだわりを分析することが食問題行動への援助となる可能性がある。また、保護者の心理的な支援を行う必要がある。
5. どの発達状況の子どもに対しても食発達の視点を用い、食べる機能や食の心理的側面、社会的相互作用などを多角的に判断し、かかわることが必要となる。

### 謝辞

本研究を行うにあたり、懇切なるご指導を賜りました関係各位、そして、調査を行うにあたりご協力いただきました保育園、施設関係者の皆様、調査にご協力頂いた保護者の皆様に、心より感謝いたします。

### 引用・参考文献

- 秋山千枝子・堀口寿広・橋本創一・田村麻里子 (2007). 保護者の「育てにくさ」に寄り添うチェックリスト. チャイルドヘルス, 10(3), 204-208.
- 今井令子・浅野みどり・小林加奈 (2006). 幼児期の自閉症児を持つ家族の家族機能および支援に関する検討. 日本看護医療学

- 会雑誌, 8(2), 17-25.
- 今田純雄・長谷川智子・坂井信之・瀬戸山裕・増田公男 (2005) 食の問題行動に関する臨床発達心理研究(1)―偏食の経験的定義. 広島修道大論集, 46(2号)(人文), 97-114.
- 今田純雄編 (2005). 食べることの心理学, 有斐閣選書.
- 岩崎久志・海蔵寺陽子 (2007) 軽度発達障害児を持つ親への支援. 流通科学大学論集―人間・社会・自然編, (20)1, 61-73.
- 太田百合子 (2003). 肥満児と食事特性. 小児科臨床, 56(12), 2429-2436.
- 大関武彦 (2006). 小児肥満の生活指導・支援. 小児保健研究, 65(2), 142-146.
- 風間悦子 (2005). 未就園児の食生活状況調査と教育媒体を使った食指導. Bulletin of Nagano Women's Junior College, Vol.71, 21-30.
- 久保田競 (2003). 脳の発達と子どものからだ. 築地書館, 改訂増補版 二版.
- 黒川新二 (2006). 広汎性発達障害からみた ADHD. そだちの科学, (6), 31-35.
- 郷間英世他 (2007). 特集軽度発達障害 Q&A. 小児内科, 2(39), 165-314.
- 小林隆児・鯨岡峻編著 (2005). 自閉症の関係発達臨床, 日本評論社.
- 中佳久 (2006). 小児の生活習慣病―最新治療とケアの実際. 小児看護, 29(6) JUNE, 725-729.
- 小林隆児著 (2002). 自閉症の関係障害臨床. ミネルヴァ書房, 初版第4刷.
- 小林隆児 (2007). 障害をもつ子どもの母親へのケア. こころの科学, (134), 67-71.
- 酒井治子 (2007). 子どもの食をめぐる現状と, 食をとおした子育て・子育て支援. 小児看護, Vol.30(7), 874-879.
- 佐々木正美監修 (2006). 自閉症のすべてがわかる本. 健康ライブラリーイラスト版講談社.
- 篠崎昌子・川崎葉子・猪野民子・坂井和子・高橋摩理・向井美恵 (2007). 自閉症スペクトラム児の幼児期における摂食・嚥下の問題―第2報食材の偏りについて. 日摂食嚥下リハ会誌, 11(1), 52-59
- 篠崎昌子・川崎葉子・猪野民子. 結城暎子・菊池信行・松浦信夫 (2005). 母子の食行動と肥満との関連についての検討. 小児保健研究, 64(2), 279-286.
- 島田博 (2006). 発達障害を分かっしてほしい―アスペルガー症候群の子どもと家族が「学校」で会った数々のこと. ぶどう社.
- 杉山登志郎 (2011). 発達障害のいま, 講談社現代新書
- 杉山登志郎他 (2007). 特集発達障害のいま, 発達障害をめぐる理想と現実. そだちの科学, 8 / 4 -, 2-63.
- 鈴木周平著 (2004). 幼児期の軽度発達障害―その特徴, むずかしさ. チャイルドヘルス, 7(7), 496-499.
- 曾根真理枝 (2006). 幼児の食事に関する母親の意識と対応―偏食の視点からの考察. 横浜女子短期大学紀要, 21, 85-100.
- 高橋脩 (2006). 自閉症と ADHD の愛着の発達について. そだちの科学, 7 / 10-20, 67-72.
- 高橋和子 (1998). 親が子どもを援助するために必要なこと: 高次機能自閉症児の親として. 聴能言語学研究, (16), 109-114.
- 竹田契一・山下光他 (2004). 特集幼児期軽度発達障害児への支援. 発達, 25(97), 2-42.
- 竹田契一・若宮英司・里見恵子・西岡有香 (2006). ADHD・高機能広汎性発達障害の教育と医療. 日本文化科学, 第1版.
- 鐘<sup>たたら</sup>幹八郎 (2006). アイデンティティの心理学. 講談社, 第25版.
- 田中康雄著 (2007). 発達障害のある子どもと愛着. こころの科学, (134), 79-84.
- 田中康雄 (2007). 軽度発達障害のある子のライフサイクルに合わせた理解と対応. 学研, 第4版.
- 田中康雄 (2006). ADHD の明日を信じて. そだちの科学, (6), 42-49.
- 富田和巳・加藤武 (2006). 多角的に診る発達障害. 診断と治療社.
- 中佳久・小谷裕美 (2003). 近畿地方における知的障害児の肥満実態調査および肥満指導に関する一考察―第1報. 小児保健研究, 62(1), 17-25.
- 中佳久・小谷裕美 (2003). 近畿地方における知的障害児の肥満実態調査および肥満指導に関する一考察―第2報. 小児保健研究, 62(1), 26-33.
- 中根昇 (2007). 軽度発達障害とは何をいうのか. 小児看護, 30(9), 1236-1241
- 根ヶ山光一 (2007). 発達行動学から見た子どもの食発達. 小児看護, Vol.30-7, 860-873.
- 長谷川智子・今田純雄 (2004). 幼児の食行動の問題と母子関係についての因果モデルの検討. 63(6), 626-634.
- 長谷川智子 (2000). 幼児の肥満と母子関係―肥満の程度とタイプの観点から. チャイルドヘルス, 3(9), 684-686.
- 長谷川智子・今田純雄・坂井信之 (2001). 食物嗜好の発達心理学的研究. 小児保健研究, 60(4), 479-487.
- 芳賀彰子・久保千春 (2006). 注意欠陥/多動性障害, 広汎性発達障害児を持つ母親の不安・うつに関する心身医学的検討. 心身医, (46), 176-187.
- 古川照美・富永真己・木藤江里子・藤嶋聡子・菅原典夫・高橋一平・松坂方士・木田和幸・西沢義子・梅田孝・中路重之 (2006). 子どもの生活習慣形成時期における母親と子の生活リズム, 食生活状況との関連. 弘前大保健紀要, (6), 47-54.
- ポウルビー著・二木武監訳 (2004). 母と子のアタッチメント. 医歯薬出版株式会社, 第5刷
- 松田ちから著 (2006). 発達に心配りを必要とする子の育て方. 黎明書房.
- 水津久美子・穴井恭子・中村さゆり・山本真弓 (2000). 児童の食生活に関する実態と保護者の意識との関連について―児童の元気創造を目指して. 山口県立大学生生活科学部研究報, (31), 29-40.
- 村松多美恵・廣瀬由美子監修, 新井英康 (2005). 「気になる子ども」の配慮と支援. 茨城大学教育学部附属養護学校編. 中央法規.
- 柳沢ゆかり・綿 祐二 (2012). 自閉症のこだわり行動による生活困難性への支援のあり方―福祉専門職と母親の支援内容についてのエピソード分析―. 文京学院大学人間学部研究紀要, Vol.13, pp.19-32.
- 横山浩之 (2005). 軽度発達障害の臨床―AD / HD・LD・高機能自閉症. 診断と治療社, 第3版.

## Support for Parents in Regard to the Dietary Issues of Children with Autism Spectrum Disorder

Satoko Kojima

*Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School*

We herein conducted a questionnaire survey on parents of children with normal development, those of children with Autism Spectrum Disorder (ASD), and those of children with other developmental disorders. Analysis of the data obtained revealed a relationship between the picky eating behaviors of children with ASD and their dietary developmental behaviors during the weaning period. In addition, the results suggested that the behavioral characteristics, sensory abnormalities, and difficulties in forming social relationships associated with autism are factors that affect the dietary developmental behaviors of children with ASD during the weaning period. Guidance for promoting a balanced diet, in other words expanding the range of foods eaten, was found to possibly increase the psychological burden on parents of children with ASD. It is therefore important in support related to dietary issues for parents of children with ASD to provide support based on a broad analysis that ranges from each child's picky eating behaviors to the dietary environment, the tactile sensation of eating utensils, and sense of taste, and to provide psychological support.

**Key words** : children with Autism Spectrum Disorder, unbalanced diet, pickiness, support for parents